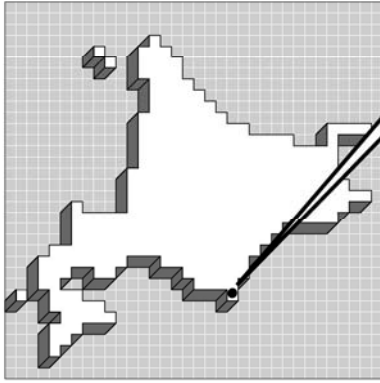


連載 わがマチの自慢 No.2



えりも町

—風はひゆるひゆる

波はざんぶりこ...(注1)—

が、一年のうち一〇〇日に渡って襟裳岬とその
えりも町は、乳白色のベールのような濃い霧

1. 風のマチ えりも町

わがマチの自慢第二回は、えりも町を取り上
げ、風をテーマに紹介する。

周辺を覆い、風速一〇m以上の強風・暴風日数
は三〇〇日にのぼる。平均風速も九・六mあり、
一年中強い風にさらされている過酷な環境であ
る。

この地に立つと、島倉千代子の『襟裳岬』^{注1}
の情景が妙に馴染み、懐かしみさえ憶える。
また、「北の街ではもう悲しみを暖炉で燃や



(襟裳岬 右手が百人浜緑化事業の森林)

しはじめてるらしい…黙りとおした歳月をひろい集めて暖めあおう…」という森進一の『襟裳岬』^{注1}の歌詞の比喻に戸惑いながらも感慨を新たにす。

えりも町は松前藩の時代からアイヌとコンブ漁で交流をもったところである。

北海道の背骨と言われる日高山脈が南へのび襟裳岬から海へ岩礁が2km続き、親潮と黒潮がぶつかる豊かな漁場がある。海に沈む夕日と海からのぼる朝日の両方が見られる地である。

(注1) 歌手：島倉千代子、作詞：丘灯至夫

作曲：遠藤実 (昭和三六年)

(注2) 歌手：森進一、作詞：岡本おさみ

作曲：吉田拓郎 (昭和四九年)

2. 砂漠を森に戻し 海を再生したマチ

明治の初め、この地を開拓するにあたり燃料に用いるために、海岸沿いの森林が次々と伐採された。その後、イナゴの大発生、さらに強風が追い打ちをかけ、またたく間に、えりもは「砂漠」と化してしまった。樹木どころか草一



(砂漠と化した荒地)

つ生えず、辺り一帯は赤土に覆われ、舞い上がった赤土は海の色をも変えた。住民は、屋外では頬被りをしなければ息もできない程で、そこで生活することすらまもなくなくなった。

この状況を打開すべく、昭和二八年、第二次世界大戦により中断された治山事業を復活させる形で緑を蘇らせる本格的な取り組みが始まった。



(曲がった幹が風の強さを物語る)

事業は、まず、荒廃した土地に草を植える「草本緑化」から始められたが、強風によってまいた種子は吹き飛ばされてしまう。試行錯誤の末、種子と肥料をまいた上に、海岸に打ち上げられた雑海藻で覆う方法を試したところ、飛散を防げるばかりか、費用の節約や施工の簡易さなども得られ、「えりも式緑化工法」と名付けられた。この方式を導入して以降、事業は飛



(緑化事業の成果—百人浜)

躍的に進んだ。また、草本緑化と並行して進められていた、木々を植える「木本緑化」も同様に試行錯誤が続いていたが、クロマツを中心に広葉樹のカシワやアキグミなどを植栽樹木に選び、厳しい自然環境に対応できる防風施工の改良などを重ねた結果、平成二五年度末現在で約一九二haの木本緑化が完成した。

緑化事業の継続により、それまでは飛砂によ



(コンブ干し作業)

る海水の汚濁などで落ち込んでいた水産業も、草本緑化がほぼ完了した昭和四五年以降、徐々に魚介類の水揚げ高が伸びるようになり、平成二五年度末現在では一、四〇七tになっている。また、コンブ類の品質も向上し、えりもの緑化は住民の生活環境が改善されただけではなく、地元産業の振興にも大きく貢献するという結果をもたらしている。えりもの緑化事業には、平

成二五年度末までに、現在価格で換算すると約二五億円、延べ人数で約一〇万人というコストと労力が費やされた。一度失われたえりもの森が、半世紀余りにわたる人の努力によって息を吹き返すという環境再生を実現した功績は大きい。この緑を絶やさぬよう、引き続き木本緑化や植栽を進め、「環境保全」という壮大なテーマとともに、えりもの森づくりを次代にしっかりと引き継ぐことが求められている。(えりもの町町勢要覧)

3. 風をパートナーにするマチ

えりもの歴史は風とのつながりをなくしては語れず、また、風があるからこそえりもの町が生まれたと言っても過言ではない。砂漠化を生んだ一年中吹きすさぶ強風とどう向き合って文化を育んでいくか。このテーマは現在に至るまで不変のものであり、えりもの人々は、常に真正面からさまざまな風を受けてきた。緑化事業によって徐々にえりものに緑が戻ってくると、その風を積極的にまちおこしに組み入れていこう



(岬の2基の風力発電機)

とする動きが具体的にになっていった。風をエネルギーとして利用する手だてはないかという声に応える形で、平成八年、民間企業が出資して初めて二基の風力発電が開始された。現在、岬に二基、本町に一基の発電機があり、環境保全として注目度の高い風力発電のモデル事業地としての役割も果たしている。(えりも町町勢要覧)

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が発生し、福島第一原子力発電所で事故が起こった。報道等は「原発の安全神話」が崩れたとした。しかし、一体、誰がこの安全神話を創ったのか、

誰がそれを実証したのか。一九五四年第五福竜丸被曝事件^{まじ}を契機に、日本国内で米国への批判が一気に高まり、日米関係の悪化を憂慮した側が原子力の平和利用を仕掛けたという。「毒を以て毒を制す」という言葉を持ち出し、「原子力は安全、平和利用をしよう」と、民間団体の名のもとに一大キャンペーンを張った。全てはこ

こから日本国内の原子力発電所の展開が始まったのである。戦後史の正体一九四五―二〇一二 孫崎亨(株)創元社「戦後再発見」双書①(要旨)。

今、我が国では、この原子力発電に量的に、コスト的に代替できる自然再生エネルギーの活用が模索されている。その一つに風力発電も有効な手段としてあげられている。

しかし、風力発電も現状では切り札になりきれない短所もある。野鳥が翼に衝突するバードストライクなどの環境アセスメントからの指摘、低周波音などの人体に対する影響、あまりの強風では装置が損傷するという問題、大きな矩体

で設備投資が高むなど、種々改良の余地もあるようである。是非、えりも町において、えりもに吹く風を利用し、風力発電の短所を克服する新たな風力発電システムを実用化して貰いたいものである。

(注3) 一九五四年三月一日、米国はマーシャル諸島のビキニ環礁で水爆実験を行い、その風下八五マイルの地点で第五福竜丸がマグロのトロール漁を行っていて被曝した。



(えりも灯台まつり)



(えりも海と山の幸フェスティバル)

4. 風を克服し

風の恵みを楽しむマチへ

えりも砂漠と化した荒廃地からの強風と飛砂は、生活環境を最悪にし、住民は集団移転さえ考えたほどであったという。NHK『プロジェクトX〜挑戦者たち〜』（『えりも岬に春を呼べ〜荒れ地を森に・北の家族の半世紀〜』で紹介されたように、不可能と思われた緑化事業の成

功は、町の基幹産業である水産業の振興をもたらした。えりも町は、昭和四六年に過疎振興地域の指定を受けたが、昭和五五年にはこの指定が解除された。親が懸命に緑化作業などに従事する姿を見て、町を出る希望を捨て留まることにした若者たち、希望が芽生えた町に戻ってきた若者たち、事情はそれぞれ違いこそすれ、町に人が戻ってきたのである。緑化による地域の活性化が一段と進み、一時話題となった嫁不足の問題さえ過去のものとなったのである。

また、観光客は平成四年の四八万人をピークに年間約二〇万人の入り込みがある。緑化事業によって広がった緑の樹海と紺碧の大海原との素晴らしいコントラストが新しい観光資源として評価されているとのこと。

「襟裳の春は何もない春です」^(注)と歌われ、憤慨した地元の人たちは、えりもの風を克服し、「えりもの春は世界一の春です」と笑顔で歌える程になり、風の恵みを手にしたのである。

〈取材後記〉

えりも町の名から、記者は競走馬エリモジョージを思い起す。テスコガビー、カブラヤオーと同期で昭和五一年天皇賞(春)を逃げ切り優勝して「何もないえりもに春を告げた」と絶賛され(実況：杉本清アナウンサー)、昭和五三年宝塚記念では当時最強世代と言われた一期下のステイヤー、グリーングラスを子供扱いにした。強い勝ち方をしたかと思えば、次走はシンガリ負けをするという、期待を裏切る天才、^々気まぐれジョージの勇姿が目につかぶ。

一般社団法人北海道地域農業研究所
特別研究員 西野 義隆

